

第七章 レトリックの存在理由 ヴィトゲンシュタインと比喩の諸相

【1 導入】

20 世紀の代表的哲学者の一人であるヴィトゲンシュタインの哲学的関心は、常に言語に注がれていた。そして彼の哲学において、レトリックは意外なほど重みを持っている。ただし、一口に「レトリック」と言っても、それが意味する内容は多岐にわたろう。ヴィトゲンシュタイン哲学が重視したのは、言語的表現法・表記法としての「レトリック」であり、彼はそれをしばしば「Gleichnis（比喩）」という語で表した。そこで本稿では特に、比喩という観点から、ヴィトゲンシュタインとレトリックの関わりについて述べることにする。ヴィトゲンシュタイン哲学については、少なくとも三つの切り口から、比喩との関わりを論じることができる。それら三つを次のように箇条書きで表しておこう

(a) 「処方薬としての比喩」、(b) 「病原としての比喩」、(c) 「“病原”との共存の可能性へ」。各項目の内容は以下で明らかにするが、以上の三点は緊張関係を保ちつつ絡み合っている。この絡み合いは、比喩に対するヴィトゲンシュタインの決して単純とは言えない態度を表している。比喩に対するヴィトゲンシュタインの両価値的な態度は、比喩と哲学の間の微妙な関係を反映していると言えるかもしれない。本稿では、まず次節で (a) の側面に触れた後、専ら (b) と (c) の二つの側面に重点を絞って考察を進めたい。

【2 処方薬としてのレトリック】

ヴィトゲンシュタインは一般に、いわゆる分析哲学、言語哲学系の伝統に属する哲学者だとされている。はじめに指摘しておきたいことは、そのような哲学者としては他に例を見ないほどに、彼はレトリック、特に比喩を多用した、という事実である。彼は比喩を多用しただけでなく、それを巧みに使ったのであり、前期・後期時代を問わず、彼の比喩は人々に鮮明な印象を残してきた。大きなところでは、彼の前期哲学には、命題を像に喩える発想がある。この考えでは、絵画とは形態は違うものの、命題は絵画と同じく事実を写し取る「像」だとされた。次いで後期哲学には、言語ゲームの隠喩がある。この比喩では、言葉を話すことは一定の規則に支えられた活動をすることだという観点から、言語がチェスやテニスなどのゲームになぞらえられている。

他の有名な比喩にも触れておこう。『論理哲学論考』はその最後に、大どんでん返しがある。そこでは、それまで読者が読み進めてきた『論考』の諸命題は実は無意味だった、と宣言される。その際用いられるのが、切り切れれば用済みとなり、後は投げ捨てられるべき「梯子」の比喩である。また中期以降に登場した家族的類似の概念がある。これは或る概念の外延のメンバー間の関係を、

家族の成員間に見られる種々の容貌的類似性を喩えに説明するものである。「病」の喩えも有名である。ヴィトゲンシュタインは哲学の諸問題を知性の病氣と捉え、自らの哲学を治療的なものだと考えたのである。これら以外にも、日常言語を新旧の区画が入り混じった「古都」に見立てる喩えや、哲学問題にあがく我々を「蠅取り壺の蠅」とする喩えがあるし、有名な私的言語論の文脈でも、「箱の中のカブト虫」や「同じ朝刊を二部買う人」といった喩えが頻繁に登場する。

ヴィトゲンシュタインの喩えは枚挙にいとまがない。哲学に対する自分の貢献について、彼はこう述べている 「私が発明するのは、新しい喩えである」と。彼の自己理解によれば、哲学における彼の仕事は、概念の明晰化を効果的に行うための新しい喩えの発明なのである (CV p.16)¹。別の箇所でもヴィトゲンシュタインはこうも述べている 「哲学の仕事は、治癒のための言葉 (das erlösende Wort) を見つけることである (MS107, p.114)²。」哲学の仕事が彼にとって、「治癒のための言葉」を見つけてのことであり、そのような哲学に対する彼の貢献が喩えならば、わけても「言語ゲーム」、「家族的類似」といった喩えが、彼が言う「治癒のための言葉」に相当すると言えそうである。とにかくヴィトゲンシュタインは、有用な考えに効果的喩えを与えることで、その考えを際立たせた。そして多くの人々が認めるように、彼はそれを極めてうまくやってのけたのである。

【3 病原としてのレトリック】

喩えを駆使した反面、ヴィトゲンシュタインは日常言語に見られる喩え表現をおそらく喩えに備わる力を知っていたが故に 非常に警戒した³。上でも触れたが、彼は哲学の諸問題を知性の病氣と考えた。この関連で彼が哲学を「言語による理性の幻惑に対する戦い (PI §109)」と捉えたことはよく知られている。だが言語はいかにして理性を欺くのだろうか。彼の答えはこうである
我々の言語形式間に組み込まれたアナロジーや喩えが我々を欺くのだ。この考えはかなり早くからヴィトゲンシュタインに見られる。そして同じ考えは『哲学探究』(以下、『探究』)にも登場する。『探究』から引用しておこう

誤解とは……とりわけ我々の言語の様々な領域における、言語形式間の或る種のアナロジーが引き起こすものである (PI §90)

我々の言語形式に組み込まれた喩えが偽りの見せかけを生む…… (PI §112)

言語形式間のアナロジー即ち類似によって生じる哲学的問題とは、一つには時

間に関する問題である (TS220 §98) ⁴。「時間」という語と「テーブル」という語の間には、両者が共に名詞だという点で、表現形式が同じになっている。加えて「時間が来る、過ぎ去る」といった表現は、「人や乗物が来る、過ぎ去る」といった表現と同型である。さらに我々はテーブルの長さだけでなく、時間の長さについても語る。このような物や人の文法とのアナロジーに依拠して思考を進めるなら、どうなるか。例えば「テーブル」に指示対象があるのと同じように、人は「時間」にも指示対象があるのでないか、と考えてしまう。さらに、部分的にはもはや無く（過去）、部分的には未だ無く（未来）、在る部分には幅がない（現在）ものの長さはいかにして測れるのか、という困惑も生じよう。事実アウグスチヌスは、時間に関するこの種の問題に悩んだのだった。時間の文法と事物の文法のアナロジーは、言い換えれば、時間を擬物化ないし擬人化 (CV p.19) する比喩だったと言える。ヴィトゲンシュタインは一つには、このようなアナロジーや比喩が我々の知性を惑わすとしたのである。

だがヴィトゲンシュタイン自身が格闘したのは、時間概念でなく心的概念に組み込まれたアナロジーや比喩だった ⁵。多くの人は次の考えを尤もと思うに違いない。すなわち「マッチ箱」といった名詞にある物体が対応しているように、「痛み」という名詞にも何らかの実体が対応している。この実体は我々の内部にある。ただしこの内部というのは、我々を解剖して見つかる世界ではない。それは物理的内部とは別次元の内部世界であり、そこにはマッチ箱や五十円硬貨といった物体が在る代わりに、痛みや残像といった意識現象が浮かんだり消えたりするのである。多くの人が大なり小なりこのように考えるだろう。ヴィトゲンシュタインはこの考えに潜む幾種かの危険な表現を指摘する

(1) 心的概念の名詞表記 「我々を混乱させるのは“痛み”という名詞だ。この名詞は、[それが名指す対象物が存在するはずだという]錯覚を生み出すように見える (LPE p.206)。」

(2) 物の記述とのアナロジー 「“私は歯に痛みを持っている”では、痛みの表現は“私は [ポケットに] マッチ箱 / 五シリングを持っている”という記述と同型にされる (LPE p.263)」、“痛みを持っている”という奇妙な隠喩 (MS120 p.110v)。」

(3) 内-外の描像 「……“内面”というのは危険な隠喩なのだ」、「露わにする、即ち内と外、という隠喩が、実際にかに使われているかを明らかにせねばならない (LPE p.223)。」

これらは皆 内-外という空間的描像の下で、痛みや心といった概念をモノに見立てる 擬物化という隠喩に対する疑念の表明である。これらの表現は、時間を擬物化する比喩同様、既に常套化した「死喩」である。ヴィトゲンシュ

タインは上記の比喩について言うだろう 「[これらの] 隠喩が、暴君のように我々に君臨するのだ (PR p.82)」 と。というのも、心的概念の擬物化はとりわけ、物理的世界とは独立に精神的世界が存在するとするデカルト主義的二元論に結び付く。デカルト主義においては、物的世界と心的世界は共に「もの」の世界である。両者はただ、種類が異なる「もの」なのである。しかしこう考えることで、デカルト主義は、物的世界と心的世界という異なる「もの」の世界が、一体いかに関係し合うのかという心身問題、また直接に覗き込めない他人の心が実際に存在する保証があるのかという他我問題に苛まれてきた。このような問題を生むが故に、「…… “内面” というのは危険な隠喩」なのである。

比喩やアナロジーが知性を幻惑し、哲学的問題を生むなら、ヴィトゲンシュタインはどのような対処をすべきと考えたのだろうか。一つには、比喩やアナロジーの消去による問題の解消、という方法が考えられる

問題の解決は、不安を生み出すアスペクト これは我々の文法における或る種のアナロジーが引き起こす を消去することだ (MS157b p.14r)

[誤解] の多くは、表現形式を別のもので置き換えることで消去される…… (PI §90)

比喩は他の表現に言い換え可能だ、という考えには、次のような比喩観が潜んでいると思われる

比喩は何かに対する比喩でなければならない。そしてもし或る事実が比喩によって記述できるなら、比喩を取り払い、それなしにその事実を記述できなければならない (LE pp.42-3, cf. WVC p.117)

これは一九二九年の「倫理学講話」からの引用だが、この考えにはヴィトゲンシュタインが好んで使うタイプの論法がある。つまり比喩的表現 (すなわち字義的でない表現) とは、字義的である表現とのコントラストがあってこそ比喩的なのであり、それゆえこの対比がないところで或る表現を「比喩」と呼ぶのは無意味である。ある表現が比喩なら、それに対応する字義的表現がある。したがって同じ事実は常に、比喩なしに、字義的表現の方で記述できるのである。

「情報の洪水」という隠喩を例にとってみよう。この隠喩は、情報の多さと洪水での多量の水との類似に基づいている。つまり情報が多い様子が、洪水で溢れる多量の水と、多さの点で似ているから、情報が水に喩えられて「洪水」と言われるのである。このように「情報の洪水」とは、情報の過多に対する隠喩であり、同じ内容は、洪水の喩えなしに「多量の情報」と表せた。

「倫理学講話」の比喩観においては、比喩とは、それを選ぶことで修辭的効果を狙うこともできれば、それを取り外し、無しで済ませうる、いわば装飾品である。つまりここでは、比喩とは我々が任意に選択できるもの、オプションルで、非本質的表現だと考えられている。

だが、果たして心的概念に組み込まれた比喩も同じなのだろうか。

【4 「病原」との共存】

4-1 この問題は後で検討することにして、後のヴィトゲンシュタインには、上のとは異なる比喩観が見つかる。本稿の残りの部分では専ら、この比喩観の考察に関わることになる。『探究』第二部の次の箇所での、比喩に対する言及を見よう

表情豊かに朗読しながらこの単語を発音すると、それはそれ自身の意味で完全に満たされる。……「意味が語の使用なら、なぜそんなことが起こるのか。」
いや、私は比喩的にそう言ったのだ。ただし私はその比喩を選んだのでない
それは私に強いられたのである (PI p.215a 強調追加)。

先に見た比喩観では、比喩は字義的表現の代わりに選択されるオプションな表現だった。だが『探究』のこの箇所には、変化が見える。ここで比喩とされる表現は、選択されたものでなく、選択の余地無しに強制される表現とされているからだ。

上の引用で話題になっているのは、「意味体験」と呼ばれる心理現象である。感情を込めて詩を朗読するとき、言葉がその意味に溢れるように感じられることがある。また或る語がその意味を体現していると感じる経験、つまり「笑」という字は本当に笑っているように見える、「はる」という語には春の響きを感じる、といった類の経験は、多くの人に心当たりがあるはずだ。逆に「笑」をじっと眺めていると、あるいは「はる」を機械的に繰り返すと、これらの語が「意味」を失うように感じることもある。さらに文脈外で単独で発音された同音異義語「こい」は、あるときには「濃い」として聞こえたり、あるときには「鯉」として聞こえたりもするだろう。ヴィトゲンシュタインが言う意味体験とは、このような体験のことである。

ここでの注意点は、この体験に対し「意味」という語が使われている点である。ヴィトゲンシュタインはあちこちで、次のような疑問を発している 「…
…なぜ君の体験に、まさにこの[“意味”という]語を使うのか (RPP2 §574)。」
というのも、語の意味とは何だろう。ヴィトゲンシュタインは語の意味を語の使用だと考えた (PI §43)。この考えでは、語の意味を知るとは、その用法を

知ることにはかならない。この考えは常識的に正しく思われるし、辞書編纂者やフィールド言語学者の基本原則であろう。またこの考えは日常言語学派の哲学者からクワインのような物理主義者まで、幅広い哲学者に受け入れられている。しかし語の意味がその使用なら、意味体験で体験されるのも語の使用なのだろうか。つまり詩の朗読で、ある語がその意味に満たされるとき、朗読者はその使用をたくさん感じているのだろうか。また意味体験という体験を理解できない「意味盲」の人は、語の使用を感じない人なのか。語の使用を感じるとはそもそもどういうことか。　　こういった疑問が生じる。

なぜ、我々の体験に対し、「意味」という語を使うのか。ヴィトゲンシュタインは結局、「なぜ」という問いを拒否する(LW1 §78)。我々がまず成すべきことは、事象に理屈をつけることでなく、むしろ事象を受け入れ、それをあるがままに記述することだからである。そしてこの場合、受け入れるべき事象というのは、通常、語の使用として説明できる「意味」という語を、我々は或る種の体験に転用して使うことが実際にある、という事実である。

そしてヴィトゲンシュタインは、この事象を比喩という概念を用いて記述している。関連すると思われる箇所を引用する

「意味」「意味する」といった語の使用のテクニックを基に、私がこれらの語を、いわば比喩的な、本義的でない意味で使って不都合があろうか(RPP1 §1062)。

この状況では、我々はこの表現を使うのである。我々は……、この[「意味」という]表現を、あの別の言語ゲーム[すなわち意味が使用であるところの言語ゲーム]から借りてくるのである(PI p.216b)。

ここでの比喩観は、「倫理学講話」とは違っている。意味体験ではある体験が比喩を用いて表されているが、ヴィトゲンシュタインは次のように、この比喩は除去不可能だとしているからである　　「[“意味”以外の]他のどんな語、他のどんな意味も、同じことを果たしてくれない(LW1 §78; cf. LW1 §63)」。確かに、「意味体験」ほど、意味体験に相応しい言葉はないように思われる。我々はこのような比喩をどう捉えるべきか。M・ブラックは「濫喩 catachresis」を、語彙の欠落を埋めるために或る語を新しい仕方を使うことと定義した⁶。ここで、ある内容が濫喩によって初めて言い表されるなら、その内容にとってその比喩は不可欠である。意味体験での「意味」の使用は、このような濫喩の一種と言えるかもしれない。

次の所見は決定的に重要だと思われる

なぜ君は、君の体験に対し、まさにこの[“意味”という]語を使うのか。...
...それが、この体験の表出なのだ.....痛みの原初的表出が痛みに属している
ように、この表現はこの体験に属しているのである (RPP2 §574 強調追加)。

指摘されているのは、

意味体験：その表出 = 痛み体験：その原初的表出

というアナロジーである。痛みの原初的表出とは、怪我をしたときに思わず漏れる叫びや呻きといった、自然ないし自発的な反応である。それは、我々に不随意に強いられるものである。人間にこのような反応が一切なければ、人間の社会に痛みの概念はそもそもありえなかつたであろう。その意味で痛みの原初的反応は痛みの概念の根幹にある。これはヴィトゲンシュタインの有名な考えである (cf. PI §244)。他方、意味体験の場合、叫びのような非言語的反応はない。叫びに代わる意味体験の自然ないし自発的表出とは、「意味」という語を用いて体験を表明するという、まさにその行いだらう。この語を使う、ということが、我々に不随意に強いられる反応なのである。そしてこのような反応があつてこそ、意味体験という概念が可能なのであり、その意味で「意味」という語の使用が意味体験の根幹にあるのだ。

痛みと意味体験の違いは、前者の自然な反応は言語的でなく、後者の自然な反応は言語的だという点である。自然状態で人間は言葉を話さないという理由で、後者を「自然な言語的反応」と呼ぶべきでない、と考える人がいるかもしれない。しかし「自然」には広い意味がある。したがって、習慣化した行動パターンが「第二の自然」と呼ばれることがある。子供は毎日の実践によって、基本的国語能力を「第二の自然」となるまでに身に付けるものである。そのような第二の自然が我々に強いられる反応が、例えば意味体験の言語的表出なのである。

「意味」の転義的使用は、「情報の洪水」のように、予め存在する類似に基づく比喩ではない。というのも類似に基づく比喩なら、当の類似に関する字義的言明に書き直せよう。しかし意味体験での表現は言語習得者に余儀なく迫ってくる比喩であり、除去や換言はできない。この点で意味体験の概念は本質的に比喩的なのである。

4-2 関連現象にも目を向けておこう。ヴィトゲンシュタインは、語に「意味」を感じるという体験以外に、曜日に「太さ」を感じたり、音に「明暗」や「色」を感じる体験にも言及している。ヴィトゲンシュタインにとって、水曜日は太

った曜日、火曜日は瘦せた曜日である（PI p.216c）。母音に関しては、ヴィトゲンシュタインはしばしば「母音 e は黄色だ」という例を使う。しかしこのような体験はそれほど稀でない。曜日に関する私の感覚はヴィトゲンシュタインのそれと一致するし、母音については、私には少なくとも、i は a より暗かったりする。この種の言語使用は、詩には溢れていると思われる。事実、母音と色を結び付けたランポーのソネットはよく知られている。

さて、我々が「水曜は太い」だとか「e は黄色い」と言うとき、そこでの「太い」や「黄色」の意味を尋ねられるなら、我々は相撲取りやレモンを指差すだろう。「太い」や「黄色」は、曜日や母音を例には説明できないからだ。そして相撲取りやレモンを例に説明される本義的意味の理解を背景に、我々は「太い」や「黄色」を曜日や母音に使ったのである。そしてこれらの語を使うことなしに、例えば「e は黄色い」が言わんとすることは表せないだろう。しかし e とレモンの間に、どんな共通性質があるというのか。なぜ我々は「黄色」という語を使ったのか。理由を尋ねられるなら、我々は困惑する。ヴィトゲンシュタインは言うだろう　我々はそれをある理由で選んだのではなく、それは我々に理由無しに強いられたのだ、と。彼によれば、意味体験での「意味」という語の使用が、痛み体験での叫びの役割を果たしているのと同様、母音の色体験での「黄色」の使用は、痛み体験での叫びの役割を果たしている（RPP2 §574）。曜日の太さ体験での「太い」の使用も同じだ。それは我々に降りかかる反応なのである。

ヴィトゲンシュタインは、相撲取りやレモンについて「太い」「黄色い」という語を使うとき、それらは一次的意味で使用されているとし、水曜や母音に使うとき、それらは二次的意味で使用されているとする。同じように、「意味」でもって語の使用を指すとき、それは一次的意味で、また意味体験で「意味」を使うとき、それは二次的意味で使われている、と言えよう⁷。

【5 言語のイメージ】

意味体験で「意味」という語を使用すること、曜日に対し「太い」を使用すること、母音に対し色・明暗を表す語を使用すること　こういった「変則的」な語の使用は、『茶色本』で既に話題になっている。ヴィトゲンシュタインは、我々が母音の明暗について語り始める様子を、ミニチュアの言語ゲームで描写している

次のケースを考えよ　B は「より明るい」「より暗い」という語の使用を教えられた。彼には様々な色の物が見せられ、これはあれより暗い色と言うのだと教えられ、「これより暗いものを持って来い」という命令に対し、物

を持って来るよう訓練され、サンプルより暗いか明るいかを言うことで、物の色を記述するよう訓練された。などなど。さて彼は、一揃いの物の列を暗い順に並べるよう命令される。彼はこれを、本を並べたり、一連の動物の名前を書き出したり、u、o、a、e、iの順に五つの母音を書き出したりして実行する。我々は彼に、なぜ一番最後の系列を書き出したのかと訊ねる。彼は言う「oはuより明るいし、eはoより明るいから。」我々は彼の態度に驚くが、同時に彼の言い分にも一理あると認める。おそらく我々は言うだろう「しかしだね、確かなのは、この本があの本より明るい仕方では、eはoより明るくない、ということだ。」だが彼は肩をすくめ、言うだろう「さあ。どっちにしてもeはoより明るい。でしょう？」(BB pp.138-9)

ここで『哲学探究』で登場する有名な生徒の話が思い出される(PI §187)。この生徒は「明るい」の代わりに、例えば「2を足す」という表現の使い方を教えられるのだった。彼は「+2」に対し一通りの正しい使用ができるようになる。しかし「+2」を繰り返し実行せよ、という命令に対し、彼は或る時点から奇妙な反応を示す。つまり1000を超えた時点から、彼は「+2」を1000、1004、1008、……と展開し始めるのである。我々は彼になぜ1000の次に1004と書いたのかを訊ねる。彼は言う「だって2を足したから。1000に2を足せば、1004になる。でしょう？」

数列のケースは、規範に関する大きな哲学的議論を巻き起こしたが、それについてはここでは触れない。二つのケースの類似点は、とにかく明らかである。基本的訓練を受けた後、生徒は学んだ語ないし概念を使い始めるが、或る時点から、我々が予期しなかった使用が始まる。

同時に二つのケースの相違点もまた、明らかだ。つまり「2を足せ」という命令に対し、……、1000、1004、1008、……と続けることが端的に間違いなのに対し、「ものを明暗順に並べよ」という命令に対し、有色物でない母音を並べることは端的な間違いでない。つまり一定数の人が、このような共感的反応に理解を示す文脈がある(心理テスト、詩作の場面、など)。ところが母音のケースを数列のケースに喩えるなら、それは「+2」を

……、1000、1004、1008、……

と誤って展開するどころか、それを

……、1000、机、椅子、……

と、「+ 2」の適用のカテゴリー・ミステイクをも犯しながら展開することに似ているのである。なのに「eはoより明るい」は何故、「……、1000、1004、1008、……」以上に端的な間違いでないのか。

答えはおそらくこうだろう　我々の言語は「+ 2」のような規則に支配されているのではないから。

一般にヴィトゲンシュタインは次の言語観で知られているかもしれない。その言語観によれば、言語とは専ら規則に関する事象であり、言葉を使うことは規則に従った活動をするることである。加えて『探究』における規則順守についての考察からは、算術の規則が規則一般のパラダイムであり、そのような規則が（内的体験の言語ゲームをはじめ）言語一般を支配している、と主張されているという印象を受けるかもしれない。しかしヴィトゲンシュタインの見解をこう表すことはミスリーディングだと私は思う。というのも彼の見解はむしろ、次のようなものだったからである。第一に、言語の規則は重要であるにせよ、言語は専ら規則に関わる事象だとは言えない。次に、言語規則のパラダイムを「+ 2」のような算術の規則に求めるべきでない。

ヴィトゲンシュタインは言っている　「哲学において我々は、しばしば言語使用を、固定的規則を持つゲームや計算にたとえはする。しかし我々は、言語使用者はそのようなゲームを行っているはずだ、とは言えない（PI §81）。」なぜなら「我々の言語の日常的使用が、[科学や算術が持つ]正確さの基準に従うことは稀でしかない（BB p.25）」からである。したがってヴィトゲンシュタインが言語をゲームに喩えるとき、彼はチェスのような固定的規則を持つゲームのみを考えているのでない

人々が野原でボールを投げて遊ぶ様子は、楽に想像できる。彼らは様々な既存のゲームを始めようとするが、しかしそれらの多くを途中で止めてしまう。彼らはゲームの合間にボールを宙に無目的に投げ、ボールを持って戯れに追い駆け合い、ボールをぶつけ合う（PI §83）

このような活動自体が、Spiel、すなわちゲーム、遊びに含まれるが、この活動の描写にはチェスのような厳格な規則は登場しない。このゲームはむしろ、規則という観点から描写するには不向きだとさえ言えよう。ゲームに喩えられる我々の言語活動にも、そのような側面がある。

ヴィトゲンシュタインは、規則順守に関する考察で算術の規則を集中的に検討した。しかしこれによって示されるのは算術的規則の規範性に対する洞察であり、それと同じ規範性が我々の言語を隅々まで支配しているということでは

ないのである。日常言語は数学とは違うという言語観こそが後期の言語のイメージであり、これはヴィトゲンシュタインの遺稿のあちこちから読み取れる。そして意味体験や母音の色体験のいった現象は、そのような言語観に立ってはじめて、有意義に考察しうるものである。

【6 心的概念に組み込まれたレトリック】

我々は、ヴィトゲンシュタインによる意味体験、母音の色体験等の心的体験の考察を通し、ある言語ゲームにとって除去不可能な比喩がありうることを確認した。ひるがえって心的概念に組み込まれた比喩はどうか。ヴィトゲンシュタインによれば、我々の心的概念には、それらを「内なるモノ」として擬物化する比喩が散見されるのだった。さらに彼によれば、そのような比喩が哲学的問題を生み出すのであり、その種の問題の一つの解消法は問題を生む表現を除去することだった。しかし我々は心的概念から「内なるモノ」の比喩を除去すべきなのか。我々の概念を変えることなしに、そのような除去は果たして可能なのか。

確かに我々が、比喩に幻惑され、物事の認識を誤ることはあろう。我々はその種の誤りを警戒すべきだ。しかし比喩による幻惑の可能性は、比喩の除去の必要性につながる必要はない。ヴィトゲンシュタイン的に考えるなら、我々がまず成すべきことは、むしろ「内なるモノ」の比喩が存在するという事象を真剣に受け取り、それをあるがままに記述することだからである。以下は「内面」という比喩についても、そのような真摯な態度を取るべきだと言われていると読める箇所である

「私は心の中で決めた。」人はこう言いつつ、自分の胸を指差したくなりさえする。我々はこの表現方法を、心理的に真剣に受け取るべきである (PI §589)

だが我々は「内面」の比喩をどのように真剣に受け取り、記述すべきなのか。さらに次の引用を見よう

「……私はそれを心の中で理解した。」人はその上、自分の胸を指差す。人はこの仕草を本気で意味しないのか！？もちろん本気だ。あるいは人はここで、ただの比喩を使っていると自覚しているのか。おそらく、そうでない。それは我々が選び取る比喩でない。[その意味で]それは比喩でない。しかしそれは比喩的表現なのである (PI p.178h 強調追加)

ここでは比喩に対するヴィトゲンシュタインの新旧の考えがせめぎあっている。

彼によれば「心の中」は我々が選択する比喩でない。したがって選択可能性（ないしその裏返しの除去可能性）を比喩の条件とするなら、「心の中」は比喩でない。だがヴィトゲンシュタインはここで、選択の余地無く我々に強いられる比喩であっても、それは比喩なのだ、と結論している。このように結論することで、「心の中」という表現に対するヴィトゲンシュタインの此処での態度は、意味体験での「意味」の使用に対する彼の態度（PI p.215a）と重なり合う。事実、上の引用（PI p.178h）はもともと、意味体験の議論の文脈に由来する（RPP1 §345）のである。

我々は心に関する「内」という表現を「本気で」使っている。とはいえ我々は、自分の身体を切開すると、その内側に心が見つかるとは思っているわけではない。身体の物理的内部に心は存在しない。しかし我々は「内」と言うのである。ではなぜ「内」という語を使うのだろうか。次のように答えるしかないのではないか。つまり、それが我々の心に関する体験の表出なのだ、と。痛みの原初的表出が痛みに属しているように、「意味」の使用が意味体験に属しているように、「内」という表現は心に関する我々の体験に属している。そして心的概念に組み込まれた、このような比喩は、当の概念にとって本質的でありうるのである⁸。

最後に二つのコメントをしておきたい。一つは、仮にこのような形で内という心の比喩を認めても、我々はデカルト主義に逆戻りするわけではない、というものである。つまり内-外の比喩に基づく心の描像を受け入れることは、心と身体の相互独立を認めることではない。ヴィトゲンシュタインは言語ゲームの身体性を強調しつつ、以下のように言った 「言語ゲームの起源および原初的形態は反応である。そこからのみ、より複雑な形態が発展しうるのである。言語とは 私は言いたいのだが [そのような反応の]洗練化である。“始めに振舞いありき”なのである（CV p.36）」、「我々の言語ゲームは原初的行動の延長である。（というのも我々の言語ゲームが行動だから。）（Z §545）」心的概念に関する言語ゲームでさえも、その始まりは振舞いにある。例えば痛みには特有の反応や状況からなる手掛かりがあり、これを用いて大人たちは子供に痛みの反応を、言葉に置き換えることを教えた。そして片言の痛みの表現は、その後、より複雑なものになっていく。我々が考察した言語使用 例えば心に対する「内」という語の使用 は、そのような複雑化の延長にある、と考えられる。それは振舞いを手掛かりに言語使用を一通り習得した者に生じる自然な言語反応として、我々の心的概念をさらに複雑化・洗練化するものである。心に関する内-外の隠喩的図式は、このような形で、我々の身体的側面、すなわち振舞いに属している。この意味で、心と身体は概念的に相互独立しているとは言えないのである。

ヴィトゲンシュタインの有名な言葉に「人間の心の最良の描像は人間の身体である (PI p.178g)」というものがある。このスローガンは、ヴィトゲンシュタイン哲学とデカルト主義的哲学の対比でしばしば引用される。最後に述べておきたいのは、内-外の比喻による心の描像を受け入れても、それは、ヴィトゲンシュタインのスローガンと矛盾しない、ということである。というのも、身体が心の最良の描像であることは、それが心の唯一の描像であることを意味しないからだ。つまりこのスローガンは、「内面」という描像を除外するものではない。心についての身体的描像によれば、他人の痛みは彼の歪んだ顔、震える肩といった、身体の外部に見て取れるものである。他方、内外の描像によれば、他人の痛みは、彼の身体の背後にある、行動には現れない心的アイテムとして概念化されている。二つの描像は、同じものに関する両立不可能な理解を与えるように見えるかもしれない。しかし、この、見たところの両立不可能性は、以下のように捉えるべきだろう。我々の痛みの概念、あるいは一般に我々の心の概念は、一枚板ではない。つまり、二つの描像は互いを蝕むようなものでなく、「原初的行動の延長である我々の言語ゲーム」において、むしろ互いを補完しつつ、我々の概念を一層複雑に、豊かにしている。

一般的に言って現代哲学は、デカルト主義的二元論への反発のため、「内なるモノ」という比喻を心的概念から除去しようとする傾向を持つ。その傾向には比喻を危険視したヴィトゲンシュタインも加担しているとされる。しかし本稿は、その潮流に対し、当のヴィトゲンシュタイン哲学を通し、ささやかな問題提起をするものであった。この種の比喻に関するこの種の研究は数少ない。今後、さらなる検討が期待される。

まとめよう。我々はヴィトゲンシュタイン哲学とレトリック、特に比喻、の関係を見てきた。ヴィトゲンシュタインは比喻を非常に有効に活用した哲学者であったと同時に、比喻を非常に警戒した。彼は哲学的問題の源泉の一つは比喻だとし、問題の解消のために比喻の除去という手段を提示した。しかし彼はまた、除去不可能な比喻にも目を向けた。我々は、大きな哲学的問題を生み出す「内」という隠喩もまた、除去不可能な隠喩である可能性を指摘し、それに対するヴィトゲンシュタイン的扱いの道を示した。

(2002年脱稿、菅野盾樹編『レトリックを学ぶ人のために』世界思想社(未刊))

¹引用に用いた書物(以下)の大半は邦訳がある(大修館書店の『ヴィトゲンシュタイン全集』および青土社からの『反哲学的断章』)が、スタイル上、解釈上の理由で、引用箇所は全て以下の原典から筆者が訳しなおした。略号を併記しておく。

BB *The Blue and Brown Books*, Oxford: Blackwell, 1958.

-
- CV *Culture and Value*, Oxford: Blackwell, revised edn 1998.
- LE ‘A Lecture on Ethics’ , in J. Klagge and A. Nordman (eds.), *Philosophical Occasions*, Indianapolis: Hackett, 1993, pp.37-44.
- LPE ‘Wittgenstein’s Notes for Lectures on “Private Experience” and “Sense Data” ’, in J. Klagge and A. Nordman (eds.), *Philosophical Occasions*, Indianapolis: Hackett, 1993, pp.202-88.
- LW1 *Last Writings on the Philosophy of Psychology*, vol.1, Oxford: Blackwell, 1982.
- PI *Philosophical Investigations*, Oxford: Blackwell, 1958.
- PR *Philosophical Remarks*, Oxford: Blackwell, 1975.
- RPP1 *Remarks on the Philosophy of Psychology*, vol.1, Oxford: Blackwell, 1980.
- RPP2 *Remarks on the Philosophy of Psychology*, vol.2, Oxford: Blackwell, 1980.
- WVC *Ludwig Wittgenstein and the Vienna Circle*, Oxford: Blackwell, 1979.
- Z *Zettel*, Oxford: Blackwell, 1967.

² MSはヴィトゲンシュタインの遺稿の中の手書草稿を意味し、続く数字は各MSの整理番号である。ヴィトゲンシュタインの遺稿は現在、オックスフォード大学出版局から出ているCD-ROMで参照できる。

³ このセクションは、拙論(「内的体験と隠喩」、『科学基礎論研究』、第九四号、二〇〇〇年)の一部を再利用した。

⁴ これは整理番号220のタイプ原稿(TS)である。

⁵ 例えばP. M. S. Hacker, *Insight and Illusion*, Oxford: Oxford UP, 1989, Ch.10を参照。

⁶ マックス・ブラック、「隠喩」(尼ヶ崎彬訳)(佐々木健一編、『創造のレトリック』、一九八六年、勁草書房所収) 十頁。

⁷ 一つ、解釈上の注意点がある。意味体験での「意味」の使用は比喩的だと言ったにもかかわらず、ヴィトゲンシュタインは、母音の色体験での「黄色」の使用は比喩的でないと言っている(PI p.216g)。その理由には問題がある。「黄色」が比喩的でないのはそれが換言できないからだ、と彼は言うのである。これは「倫理学講話」の考え方への逆行である。ヴィトゲンシュタインが色体験での「黄色」を比喩的でないとした事実、我々がこだわる必要はない。意味体験の場合と同じように、ここでの「黄色」について、彼はこう書きえたからである:「私は比喩的にそう言ったのである。ただし私はその比喩を選んだのでない それは私に強いられたのだ」と。

⁸ だが心的概念に組み込まれた比喩の全てが、その概念にとって本質的であるとは限らない。